

井辺遺跡第 22 次発掘調査現地説明会資料

—前方後方形墳丘墓の調査—

和歌山市教育委員会

公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団

調査所在地：和歌山市井辺 203 番地の 2

調査期間：平成 24 年 7 月 23 日～現在継続中

調査面積：約 760 m²

調査原因：宅地造成

主な時代：古墳時代初頭

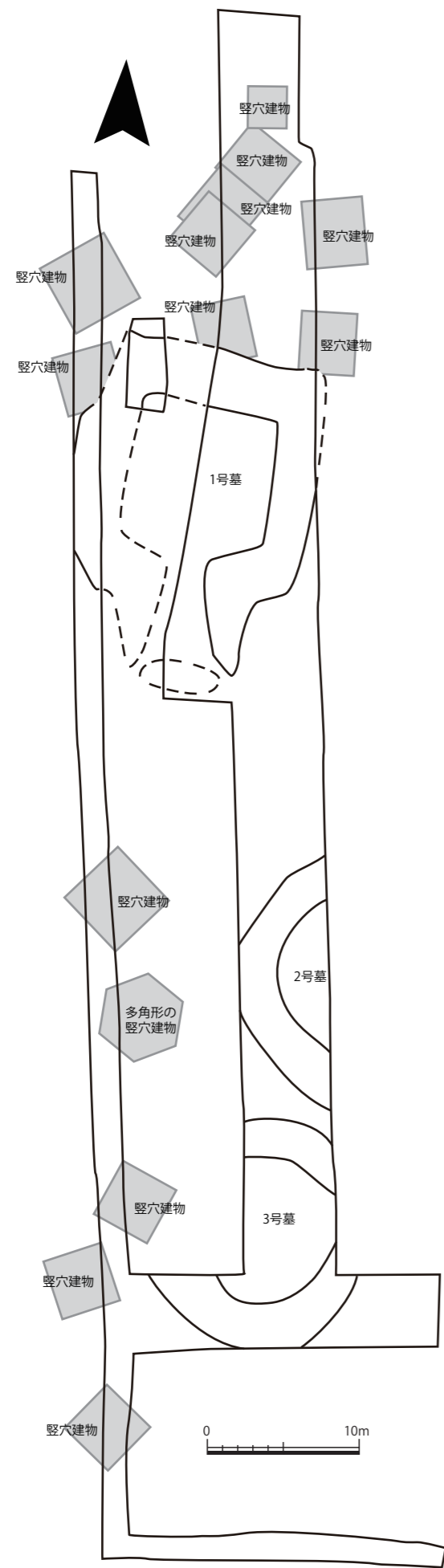
主な遺構：墳丘墓 3 基 墳丘墓に先行するものを含む竪穴建物 14 棟

井辺遺跡は、福飯ヶ峯丘陵北西の沖積地上に位置し、遺跡範囲は、丘陵に沿って南北約 0.5 km、東西約 1.5 km で扇状に広がります。今までにおこなわれた数十回の調査により、遺跡の中央や東側では、弥生時代末～古墳時代初頭の井戸や竪穴建物がみつき、集落遺跡として知られています。今回の調査地は、遺跡の東部に位置し、近隣の調査では、古墳時代初頭の竪穴建物が計 9 棟みつっています。

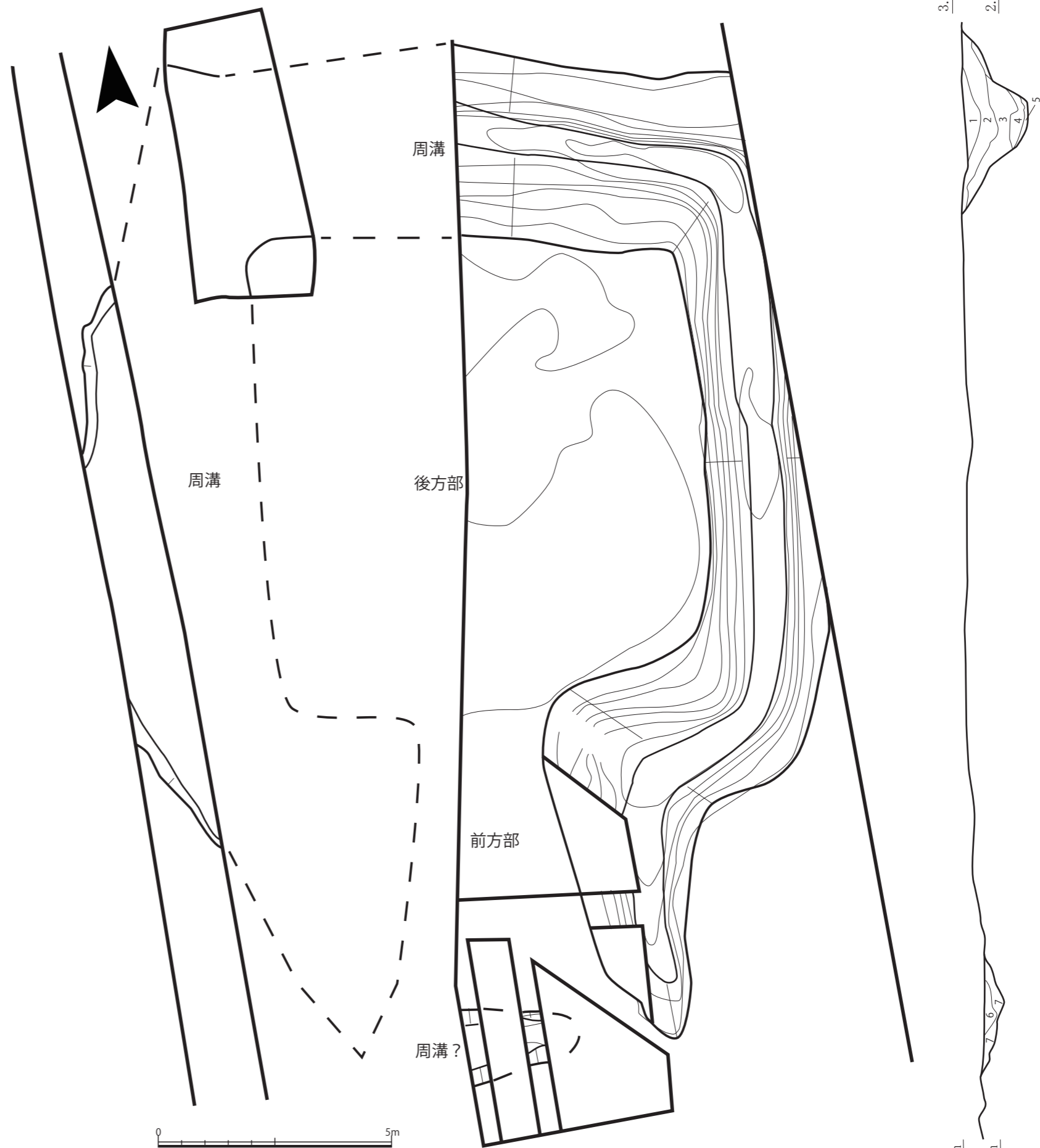
今回の調査でも同時代の竪穴建物がみつくと期待していましたが、竪穴建物に加えて墳丘墓が 3 基検出されました。井辺遺跡で墳丘墓が確認されるのは、初めてです。建物と墳丘墓には重複関係があり、建物が廃絶した後に、墳丘墓が造られています。調査成果としては、古墳時代初頭の短期間に集落域から墓域へ土地利用の変化を確認したことと、弥生時代から古墳時代に至る過渡的な墓制のあり方が明らかになりました。



第 1 図 調査区位置図 (1/25000)



第2図 遺構配置図 (1/400)



第3図 1号墓平・断面図 (1/100)

1号墓は、全長 19.5m、幅 13mの前方後方形をしています。後方部の墳丘は削平され、ほとんど残っていませんでしたが、前方部は、墳頂で多くの土器が出土していることから、削平を免れているようです。周溝は、墳形に沿ってくびれ部で屈曲し、前方部の南東隅で途切れています。前方部南端では、周溝の有無を確認するため2カ所のトレンチを設けました。その結果、周溝の可能性のある浅い溝を確認しましたが、他地点の周溝埋土とは土質が異なるため、確定はできませんでした。前方部南端にも周溝が存在するとすれば、前方部南東隅に陸橋を設けていたようです。後方部周溝が幅 2.5～3.5m、深さ 0.6～0.7m と幅広く深いのに対して、前方部周溝は幅 1.0～2.5m、深さ 0.3～0.6mと幅も深さも小さいです。墳丘墓からは、主に前方部墳頂と周溝内で土器が出土しています。これらは、墓に供えられた土器や祭祀に使用された土器で、前方部墳頂出土のものは、当時の祭祀の状況を示している可能性があります。周溝埋土は5層に分けることができ、最終堆積である最上層では須恵器片が含まれ、多く土器片や木片を含んだ中層では、庄内式新段階から布留式古段階のものが出土しました。下層では、庄内式中段階から新段階の完形に近い土器が数点出土しました。

2号墓は、一辺約 10mの方形をした墳丘墓で、墳丘はほとんど残っていません。周溝は幅 3.8m、深さ 0.4～0.8mで、南側が深くなっています。周溝埋土は1号墓と同様5層に分けることができます。現在は中層まで掘削し、同層中からは、周溝内に廃棄された土器が多量に出土しています。

3号墓は、一辺約 10mの方形をした墳丘墓で、墳丘は残っていません。現段階で調査は進んでいませんが、周溝は幅 2.5～3.5m、深さ 0.3～0.7mで、東側が深くなり、他2基の埋土と同様の堆積で、中層に多くの土器が含まれています。

墳丘墓は、四方に溝がめぐる低墳丘の墓で、古墳の原形ともいわれています。弥生時代の墓制である方形周溝墓に系譜が追え、古墳時代初頭から前期にかけて多く造られます。古墳が集落とは隔絶した丘陵上に築かれるのと異なり、集落域と接する低地に立地し、群集して数基から数十基が造られ、方形の中に1～2基程度の前方後方形のものが含まれることが多いです。

和歌山市内では、これまで鳴神遺跡群や秋月遺跡、川辺遺跡で同時代の墳丘墓がみつっていますが、前方後方形墳丘墓は、和歌山市川辺遺跡に続く2例目で、県下でも御坊市尾ノ崎遺跡や南部町片山遺跡でみついているだけです。また、秋月遺跡では、前方後円形墳丘墓や調査地の南に位置する福飯ヶ峯丘陵上には、同時期とされる全長約 60mの前方後円墳が築かれています。今回の成果は、この時期の墓制の実態を明らかにするとともに、この地域の古墳出現過程や勢力関係を考える上でも重要と言えます。